官女平遺跡

一般県道長岡大洗線道路改良事業地内埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

平成16年3月

茨城県水戸土木事務所財団法人 茨城県教育財団

官女平遺跡

一般県道長岡大洗線道路改良事業地内埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書

平成16年3月

茨城県水戸土木事務所財団法人 茨城県教育財団

茨城県は、長期的な見通しのもと県土の基盤整備を行なっており、 道路網につきましては、ゆとりのある社会の実現を目指した安全で快 適な道路の整備を進めております。一般県道長岡大洗線の改良工事は、 その一環として計画されたもので、その予定地内には官女平遺跡が所 在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財 発掘調査事業について委託を受け、平成14年11月に当遺跡の発掘調査 を実施いたしました。

本書は、官女平遺跡の調査成果を収録したものです。本書が、学術 的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひ いては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県 水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼 申し上げます。

また, 茨城県教育委員会, 大洗町教育委員会をはじめ, 関係各位からいただいた御指導, 御協力に対し, 衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団 理事長 齋 藤 佳 郎

例 言

- 1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成14年度に発掘調査を実施した、茨城県東茨城郡大洗町大貫町2307番地ほかに所在する官女平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調 査 平成14年11月1日~平成14年11月30日

整 理 平成15年10月1日~平成15年10月31日

- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久のもと、調査第一課第1班長鯉渕和彦、主任調査員川上直登・ 荒蒔克一郎が担当した。
- 4 当遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、調査員小林健太郎が担当した。

凡

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第 X 系座標を原点とし、X 軸 = +34,600 m、Y 軸 = +650,800 m の交点を基準点(A1a1)とした。なお、この原点は日本測地系によるものである。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらにこの大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は,アルファベットと算用数字を用い,北から南へA,B,C…,西から東へ1,2,3 …とし,その組み合わせで「A1区」「B2区」のように呼称した。さらに小調査区も同様に北から南へa,b,c… j,西から東へ1,2,3…0と小文字を付し,名称は大調査区の名称を冠し,「A1a1」「B2b2」のように呼称した。

- 2 抄録の北緯および東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付して併記した。
- 3 遺構,遺物,土層に使用した記号は,次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 溝-SD 柱穴・ピット-P

遺物 拓本土器-TP 土製品-DP 石器・石製品-Q 貝製品-N

土層 撹乱-K



- 土器 土製品 □ 石器・石製品
- 4 土層観察と遺物における色調の判定は,『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式 会社)を使用した。
- 5 遺構・遺物実測図の掲載方法については、以下のとおりである。
 - (1) 遺構全体図は150分の1とし、各遺構の実測図は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
 - (2) 遺物は原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。
- 6 「主軸」は,竈を持つ竪穴住居跡については竈を通る軸線とし,他の遺構については長軸(径)を主軸と みなした。「主軸」及び「長軸」方向は,それぞれの軸が座標北からみて,どの方向にどれだけ振れている かを角度で表示した(例 $N-10^\circ-E$)。
- 7 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。
 - (1) 計測値の()内の数値は現存値を,[]内の数値は推定値を示し,単位はcm・gである。
 - (2) 備考の欄は、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

ふりがな	かんじょだいらいせき							
書名	官女平遺跡							
副書名	一般県道長岡大洗線道路	各改良事業	地内埋蔵文化	上財調查報	報告書			
巻 次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調	胃査報告						
シリーズ番号	第 221 集							
編著者名	小林 健太郎							
編集機関	財団法人 茨城県教育財	才団						
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸	市見和 1 丁	目 356 番地	の 2	TEL 029 (225) 6587	<u> </u>	
発 行 機 関	財団法人 茨城県教育財	才 団						
所 在 地	〒310-0911 茨城県水戸ī	225) 6587						
発 行 日	2004 (平成16) 年 3 月 26							
よりがな所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード	調査期間	調査面積	調査原因			
かんじょだいらいせき官女平遺跡	いぼらきけんひがしいばらきぐんおおあらい 茨城県東茨城郡大洗	08309	36度	140度	31	20021101	225.00m²	一般県道長岡大
•	町大貫町2307番地ほか	-	18分	33分	~	~		洗線道路改良工
		028	34秒	29秒 「140度	33 m	20021130		事に伴う事前調査
			18分	33分				
			│	└ 17秒	J			
所収遺跡名	種 別 主な時	代 3	主 な 遺	跡	主な	遺 物	特	記事項
官女平遺跡	集落跡弥	生 竪	マ 住居跡	3 軒	弥生土器 (量 土製品 (紡錘			代と古墳時代の住 出された。また,
					土錘・管状		弥生時代	の住居跡からは穂
					器(石鏃· 颓磨石), 炉石			えられる遺物が出 り, 当地域の弥生
					(貝刃)	, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	時代の生	産様式を考える上
	古		穴住居跡	6 軒	土師器(坏・	蹇)	で貧重な質	資料となる。
		土块	亢 	1 基	土師器(坏)			
	その他時期不	明土地		1基1条				

目 次

序		
例言		
凡例		•
抄録		
目次		
第1章 調査経緯	•••••	1
第1節 調査に至る経緯		1
第 2 節 調査経過		1
第2章 位置と環境		2
第1節 地理的環境		2
第2節 歴史的環境		2
第3章 調査の成果		7
第1節 遺跡の概要		7
第2節 基本層序		7
第3節 遺構と遺物		8
1 弥生時代の遺構と遺物		8
(1) 竪穴住居跡		8
2 古墳時代の遺構と遺物		18
(1) 竪穴住居跡	••••	18
(2) 土坑		27
3 その他の遺構と遺物		28
(1) 土坑	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	28
(2) 溝跡		28
(3) 遺構外出土遺物		28
第4節 まとめ		31
写真図版		

第1章 調 査 経 緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、東茨城郡大洗町大貫町地区において、一般県道長岡大洗線の道路改良事業を進めている。

平成12年6月28日,水戸土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、一般県道長岡大洗線道路改良事業地内における埋蔵文化財の有無とその取り扱いについて照会し、これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年8月23日に事業地内の現地踏査、平成13年9月10日に試掘調査を実施した。その結果、開発予定地内において官女平遺跡の存在を確認し、平成13年9月18日、茨城県教育委員会教育長から水戸土木事務所長あてにその旨を回答した。

平成14年8月19日、水戸土木事務所長から、茨城県教育委員会教育長あてに官女平遺跡について、文化財保護法第57条の3に基づく土木工事等の通知が提出された。平成14年8月23日、茨城県教育委員会教育長から、水戸土木事務所長あてに工事により埋蔵文化財に影響が及ぶことから、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成14年9月6日、水戸土木事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、事業地内における埋蔵文化財(官女平遺跡)の発掘調査の実施について協議書が提出された。平成14年9月17日、茨城県教育委員会教育長は水戸土木事務所長あてに発掘調査の範囲及び面積等について回答し、調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。水戸土木事務所長と茨城県教育財団は、埋蔵文化財発掘に関する業務の委託契約を結び、官女平遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調 査 経 過

官女平遺跡の発掘調査は、平成14年11月1日から平成14年11月30日までの1か月間実施した。その概要を表で記載する。

期間 工程	11 月
調査準備表土除去遺構確認	
遺構調査	
遺物洗浄注記作業写真整理	
補足調査 及び 撤 収	

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

大洗町は茨城県の中央部に位置し、東西約2.5km, 南北約9kmと南北に細長い町域を有している。東は太平洋が広がり、北は那珂川が東流している。地形は東の太平洋沿岸に幅の狭い海岸砂丘が広がり、河川周辺に沖積低地がみられるほかは、台地がほとんどを占めている。台地・段丘は複雑に入り組んだ谷によって開析され、北から大洗台地、大洗段丘、大貫台地、夏海台地に分けることができる。それぞれは第四期洪積世に堆積した砂を主とする見和層、細かい礫混じりの粒砂を主とする河成段丘礫層、厚さ1~4m程度の火山灰起源の関東ローム層が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっている。

当遺跡は涸沼川右岸の標高30~33mの大貫台地北端部に位置しており、台地上には山林が広がっている。三方に望む沖積低地は、台地と約24mの比高をもって開けており、その先には涸沼川が横走している。

第2節 歷史的環境

当遺跡の所在する大貫台地は鹿島台地の一部をなし、谷を挟んで北に大洗台地、南に夏海台地が広がっている。ここでは台地・段丘における主要遺跡を取り上げる。

旧石器時代では、大洗台地のドンドン山遺跡〈2〉、磐船山遺跡〈3〉から数点のナイフ形石器が発見されているにすぎない。

縄文時代の遺跡は平坦な台地上に分布がみられ、代表的な遺跡として大貫台地上に立地する大貫落神北貝塚〈10〉、大貫落神南貝塚〈11〉、大洗台地上に立地する吹上遺跡〈4〉などをあげることができる。大貫落神北・南貝塚は戦後まもなくから知られている遺跡で、これまでに20数回に渡る調査が行なわれている。平成10年に行なわれた発掘調査では、両遺跡合わせて貝塚12地点と遺物包含層6か所が確認され、縄文時代後期前葉から後期中葉を主とする土器が出土しており1・2)、貝塚は地点ごとに時期差が認められ、当時の人々の土地利用の変遷がたどれる好例である。また、遺物包含層についても多量の土器や石錘、土器片錘、磨石などが出土し、大貫台地周辺は古涸沼湾により、外洋性と内湾性の魚貝類が生息し、食料獲得の場として、最良の場所であった3)。

弥生時代の遺跡は、大洗町全域に数多く確認されている。大洗台地では後期前半の磐船山式の標式遺跡である磐船山遺跡、大貫台地では長峯遺跡〈24〉、常福寺遺跡〈28〉などがある。長峯遺跡は昭和48年、大洗高校の建設に伴って発掘調査が行われ、17軒の竪穴住居跡と甕棺墓と考えられる土坑1基が発見されている⁴)。大洗段丘上には、一本松遺跡〈8〉、団子内遺跡〈16〉、髭釜遺跡〈17〉などの大集落が分布している。髭釜遺跡では竪穴住居跡約200軒、土坑墓のほかに竪穴住居の床面を掘りくぼめて埋葬している例や炉上に埋葬する屋内埋葬例も検出されており、弥生時代後期の墓制を知る上で貴重な調査例である。また、長峯遺跡出土の土器からは水稲農耕や織物の存在を証明する稲籾の圧痕や、布目痕のある土器が出土し、さらに髭釜遺跡からも布目痕のある土器が出土しており、那珂川下流域の特色を示している。また、鉄鏃・銅鏃などが出土しており、同段丘上にある団子内遺跡でも鉄斧が出土するなど鉄器文化を受容した比較的高度な農耕社会の存在を知ることができる。夏海台地では南藤太郎遺跡〈33〉があり、鹿島線建設に伴う発掘調査によって弥生時代後期の竪

穴住居跡27軒が確認された。同じ台地に四反遺跡〈32〉、朝後内遺跡〈34〉、千天遺跡〈12〉も確認されている。 各台地における弥生時代の住居は、台地縁辺に営まれ稲作農業を営む集団が、縄文時代の生活環境を引き継いで、村落を形成していたようである。東西の海浜と支谷部に水田を有する遺跡の自然環境は、漁労活動と農耕の両面において、極めて恵まれた地域であった。

古墳も各台地にみられ、大洗段丘には全長96.4mの大型前方後円墳である鏡塚古墳〈7〉があり、規模や副 葬品などから、被葬者はこの地域一帯を支配した豪族である可能性が高い。

古墳時代の集落も町域の広い範囲で確認されている。大貫台地には般渡遺跡〈18〉・落神遺跡〈25〉・栗 林 遺跡〈27〉・常福寺遺跡の各遺跡がある。これらは弥生時代と同じく水稲耕作の可能な低湿地に臨む低台地上 に立地するものが多く、古墳時代以後、奈良・平安時代に至る集落もほぼ以前の集落立地を踏襲している。また、古墳時代も中・後期になると沖積平野縁辺の丘陵や山間の支谷に面した台地に集落が進出する。これはお そらく畑作の進展などと関連するものであろう5)。

奈良・平安時代にはいると、律令制度のもとで、地方には国・郡・里が置かれ、大洗町周辺は鹿島郡に編入された。『文徳実録』には大洗磯前神社〈40〉が文徳天皇の856年に官社になったことや、鹿島灘に面していることから製塩が広い地域にわたって盛んに行われていたことが記されている。

中世では常福寺遺跡、小館遺跡〈38〉、一杯館跡〈39〉、天神西遺跡〈31〉などがある。小館遺跡は、涸沼に面した大谷川支谷の河口近くの舌状台地上に位置し、昭和53年、鹿島線敷設に伴って発掘調査が行われ、三条の空濠と二条の土塁の存在によって大きく二つの郭から形成されると考えられ、建武年間から南北朝期まで存在していたと考えられる⁶⁾。一杯館跡は西方に涸沼を望み、周囲は急崖となる自然に囲まれた要害で、中世大貫氏の築城と伝えられる。

以上、大洗の各台地・段丘に確認されている主要遺跡について述べてきたが、各時代にわたって、人々が生活した痕跡が残されている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図中の該当番号と同じである。

註

- 2) 井上義安ほか 「大貫落神南貝塚」『大貫台地埋蔵文化財発掘調査報告書第2冊』 大洗町大貫台地埋蔵文化財発掘調査会 2001年3月
- 3) 大洗町史編さん委員会 『大洗町史』 大洗町教育委員会 1966年3月
- 4) 井上義安ほか 「茨城県大洗町長峯遺跡」『大洗町文化財調査報告第4集』 大洗町長峯遺跡調査団 1973年12月
- 5) 註2)に同じ
- 6) 寺門義範ほか 『茨城県大洗町小館遺跡発掘調査報告 中世城郭の研究 』 大洗地区遺跡発掘調査会・日本文化財 研究所 1978年 5 月

参考文献

· 茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図』 茨城県教育委員会 2001年3月

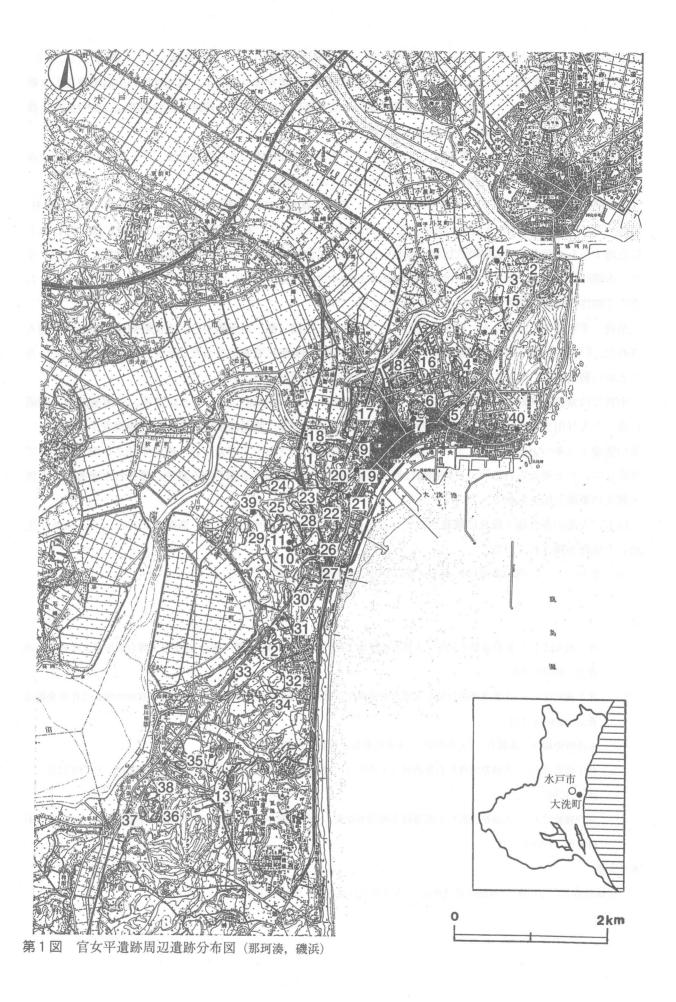
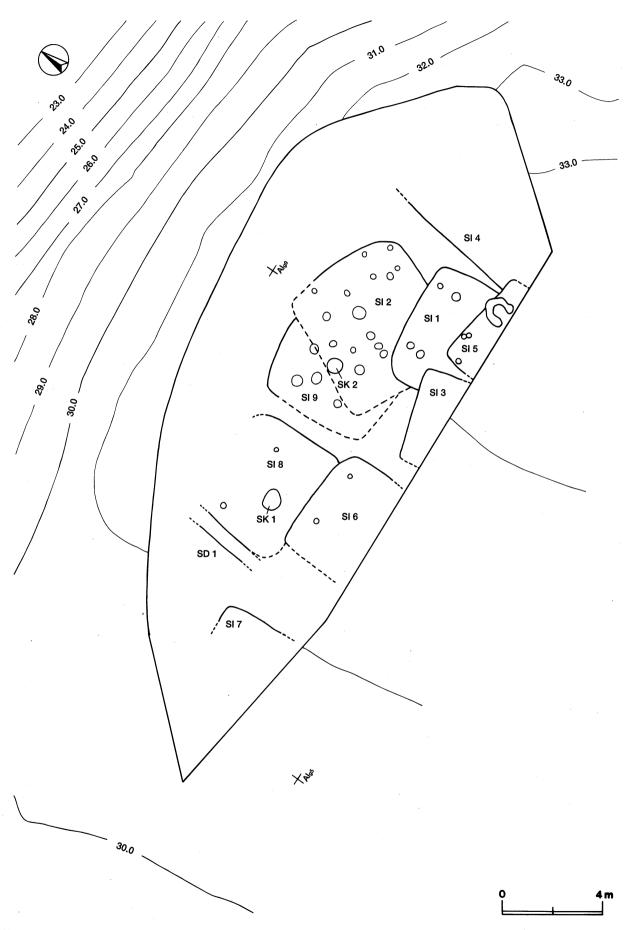


表 1 官女平遺跡周辺遺跡一覧表

				時		代									時		代		
番	遺跡名	旧	縄	弥	古	奈	中	近	番		遺跡名		旧	縄	弥	古	奈	中	近
号		石				•			号				石				•		
		器	文	生	墳	平	世	世					器	文	生	墳	平	世	世
1	官 女 平 遺 跡			0	0				21	権	現坂横穴	墓				0			
2	ドンドン山遺跡	0	0	0			,		22	寺	ノ 上 遺	跡			0	0	0		
3	磐 船 山 遺 跡	0	0	0		0			23	鬼	窪 遺	跡			0	0			
4	吹 上 遺 跡		0,	0	0	0			24	長	峯 遺	跡			0	0	0		
5	釜 堀 遺 跡		0	0					25	落	神遺	跡		0	0	0	0	0	0
6	車塚古墳群				0				26	中	畑遺	跡		0			0		
7	鏡 塚 古 墳				0				27	栗	林 遺	跡		0		0	0		
8	一 本 松 遺 跡		0	0	0	0		0	28	常	福寺遺	跡		0	0	0	0	0	0
9	勘十堀遺跡		0						29	蜂	内 遺	跡		0	0	0			
10	大貫落神南貝塚		0						30	稲	荷 前 遺	跡		0	0	0	0		
11	大貫落神北貝塚		0						31	天	神 西 遺	跡		0	0	0	0	0	
12	千 天 遺 跡		0	0	0	0			32	四	反 遺	跡		0	0	0	0		
13	おんだし遺跡		0	0	0	0			33	南	藤太郎遺	跡		0	0	0	0		
14	磐 船 山 古 墳				0				34	明	後内遺	跡			0		0		
15	二 葉 町 遺 跡		0	0	0	0			35	居	尻 遺 	跡		0	0	0	0		
16	団 子 内 遺 跡			0	0	Ò			36	石	塚 遺	跡		0	0	0	0	0	
17	髭 釜 遺 跡			0	0	0			37	大	館遺	跡			0		0		
18	船 渡 遺 跡			0	0				38	小	館遺	跡		0	0	0	0	0	
19	富士山古墳				0				39	_	杯 館	跡						0	
20	富士ノ腰遺跡			0	0	0			40	大	洗機前神	社					0		



第2図 官女平遺跡遺構全体図

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

官女平遺跡は、今回の調査によって、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡であることが判明した。遺構と しては、弥牛時代の竪穴住居跡3軒、古墳時代の竪穴住居跡6軒、土坑1基、時期不明の土坑1基、溝1条が 確認された。遺物は,遺物収納コンテナ($60 \times 40 \times 20$ cm)に 3 箱出土しており,遺物は弥生時代から古墳時代 のものである。主な出土遺物は、弥生時代の弥生土器 (壺形土器)、土製品 (紡錘車、球状土錘、管状土錘)、 石製品(石鏃、穂積具ヵ、磨石、炉石)、古墳時代の土師器(坏、甕)などである。

第2節 基 本 層 序

基本層序を確認するテストピットは、調査区南西部の台地平坦部 A1i6区に設置した。地表面の標高は約33.1mで、地表面から2.1mほ ど掘削した。基本土層図を第3図に示した。

第1層は、黒褐色の表土層である。ローム小ブロックを微量、ロー ム粒子を少量含んでいる。粘性・しまりは弱く、層厚は15~26cmであ る。

第2層は、暗褐色の表土層である。ローム中ブロック、ローム小ブ ロック、ローム粒子を少量含んでいる。粘性・しまりは弱く、層厚は 14~20cmである。

32.0m-

第3図 基本土層図

第3層は、褐色のローム層である。砂粒、鹿沼粒子を少量含んでい る。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は22~30cmである。調査区東部では確認できなかった。

第4層は、褐色のローム層である。砂粒、鹿沼粒子を微量含んでいる。粘性は弱く、しまりは普通で、層厚 は7~15cmである。調査区東部では確認できなかった。

第5層は、褐色のローム層である。砂粒を少量含んでいる。粘性・しまりは普通で、層厚は16~29cmである。

第6層は、褐色の砂層である。鹿沼粒子を微量含んでいる。粘性・しまりは普通で、層厚は20~34cmである。

第7層は,褐色の砂層である。粘性・しまりともに普通で,層厚は3~10cmである。

第8層は、黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は $5 \sim 12$ cmである。

第9層は、明黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は $3 \sim 7 \, \text{cm}$ である。

第10層は、明黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は $8\sim12$ cmである。

第11層は、灰黄色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は $3 \sim 5$ cmである。

第12層は、暗赤褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は $3\sim6$ cmである。

第13層は、にぶい黄褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は $4 \sim 7 \, \mathrm{cm}$ である。

第14層は,にぶい黄褐色の砂層である。粘性は弱く,しまりは強く,層厚は 6 ~15cmである。

第15層は、明褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は $8\sim13$ cmである。

第16層は、灰黄色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強く、層厚は8~11cmである。

第17層は、明褐色の砂層である。粘性は弱く、しまりは強い。下層は未掘のため、層厚は不明である。 当遺跡の住居跡・土坑等の遺構は、調査区西部では第3層上面、東部では第3・4層が確認できず、第5順

当遺跡の住居跡・土坑等の遺構は、調査区西部では第3層上面、東部では第3・4層が確認できず、第5層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡3軒を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡(第4図)

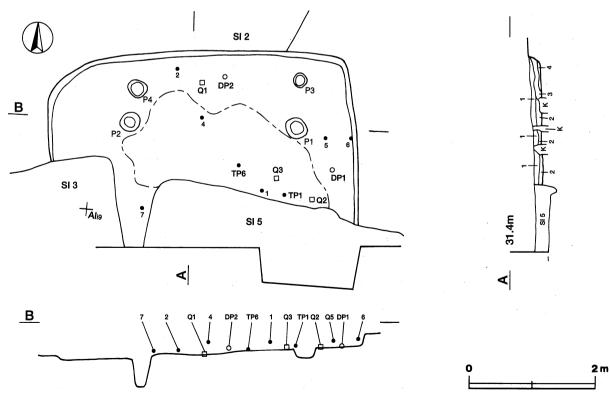
位置 調査区中央部のA1h9区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 北部で第2号住居跡を掘り込み、南西部を第3号住居跡、南部を第5号住居跡にそれぞれ掘り込まれている。

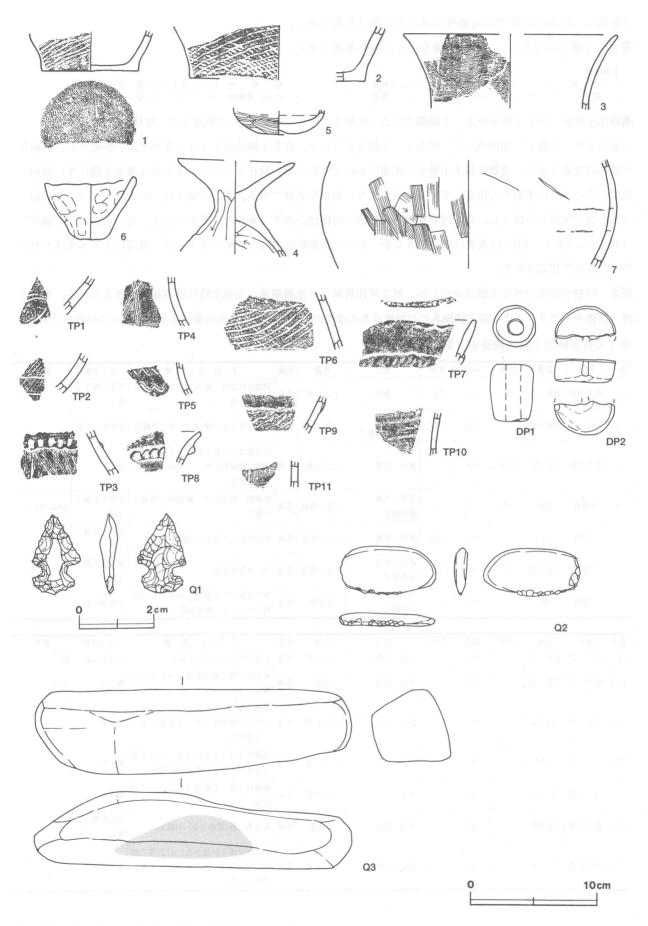
規模と形状 長軸は4.90m,短軸は調査区域外に延びているため,確認できたのは3.02mで,隅丸方形または隅丸長方形と考えられる。主軸方向は $N-83^\circ-E$ である。壁高は $6\sim16$ cmで,各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

炉 検出されていないが、Q3の炉石が出土していることから、第5号住居跡に壊されたと考えられる。 ピット 4か所。P1は深さ18cm、P2は深さ48cmで、配置から主柱穴に相当すると考えられる。 $P3 \cdot P4$



第4図 第1号住居跡実測図



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図

は配置から補助的な柱穴の可能性があるが性格は不明である。

覆土 4層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒 褐 色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量,炭化粒子微量
- 2 褐 色 ロームブロック中量,焼土ブロック微量 4 にぶい黄褐色 ロームブロック少量,焼土粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片88点,土師器片51点(坏類 2 ,坩 8 ,甕類41),土製品 2 点(管状土錘 1 ,紡錘車 1),石製品 3 点(石鏃 1 ,穂摘具ヵ 1 ,炉石 1)が出土している。弥生土器はほとんどが壺形土器の胴部片で,口縁部や底部は微量である。遺物は覆土上層から床面にかけてほぼ全域に散在しており,土師器は覆土上層に多い傾向にあるが 7 のように床面から出土しているものもあり,検討が必要である。また,Q 1 はいわゆるアメリカ式石鏃で北壁中央の床面から出土し,Q 2 は形態から穂摘具の可能性があり,東側の床面から出土している。また,破片ではあるが, $TP1 \cdot TP2$ は遺構は確認できなかったが,弥生時代中期の遺物と考えられ,周辺に人々が生活を営んでいたことが想定される。

所見 時期が判別できる土器は少ないが,第2号住居跡との重複関係から弥生時代後期後半と考えられる。管状土 錘,紡錘車,アメリカ式石鏃や穂摘具の可能性がある遺物が出土しており,当該期の生産活動を示す好資料である。 第1号住居跡出土遺物観察表(第5図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
1	弥生土器	壺形土器	-	(3.1)	7.6	長石	にぶい橙	普通	胴部は附加条二種(附加 1 条)の縄文。 底部布目痕。	中央部覆土上 層	
2	弥生土器	壺形土器	_	(4.3)	[13.8]	雲母・長石 石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部は附加条二種(附加1条) の縄文。	北壁中央床面	
3	弥生土器	広口壺	[16.8]	(5.9)	_	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は櫛歯状工具 (1単位6本) に よる波状文。	覆土中	
4	土師器	高坏	[9.4]	(7.4)	_	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	坏部内・外面ナデ。脚部内・外面へ ラ削り。	北部中央覆土 上層	80%, PL 4
5	土師器	坩	-	(1.9)	[3.2]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ磨き。内面摩耗。	東壁北部覆土 上層	
6	土師器	手捏土器	7.1	5.0	2.0	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	内・外面指頭痕。	東壁北部覆土 上層	100%, PL 4
7	土師器	蹇	_	(8.8)		雲母・長石 赤色粒子	灰黄褐	普通	体部外面ハケ目調整。内面ハケ目調整後ヘラナデ。輪積み痕。	中央部床面	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP 1	弥生土器	壺形土器	-	(3.0)		長石・石英	にぶい橙	普通	2本同時施文具による渦文。	中央部床面	PL 7
TP 2	弥生土器	壺形土器	-	(3.1)	_	長石・石英	灰褐	普通	附加条一種の縄文を施文後に平行沈 線文。	覆土中	PL7
TP 3	弥生土器	広口壺	_	(3.5)	_	長石・石英	にぶい橙	普通	頸部に隆帯が巡り押圧がみられる。 その下に櫛歯状工具 (1単位3本) による山形文。	覆土中	PL 7
TP 4	弥生土器	広口壺	-	(3.7)	_	雲母・長石	にぶい褐	普通	櫛歯状工具(1 単位 4 本) による格 子目文。その下を横走文で区画。	覆土中	PL7
TP 5	弥生土器	広口壺	-	(2.5)	_	長石	にぶい橙	普通	櫛歯状工具(1 単位 4 本) による波 状文。	覆土中	
TP 6	弥生土器	広口壺	-	(4.5)	-	雲母・長石	浅黄橙	普通	附加条二種(附加 1 条) の縄文。	中央部覆土下 層	
TP 7	弥生土器	広口壺	_	(3.5)	-	長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部は縄文が施され,口辺部と頸 部の境は隆帯が巡り指頭による押圧 がみられる。	覆土中	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP 8	弥生土器	広口壺	_	(2.5)	-	長石・石英	灰褐	普通	口縁部には隆帯が巡り指頭による押 圧がみられる。その下に櫛歯条工具 (1単位3本)による横走文。		PL7
TP 9	弥生土器	広口壺	_	(2.8)	_	長石	にぶい橙	普通	頸部は隆帯が巡り軽い押圧がみられる。頸部文様帯は附加条二種 (附加 1 条) の縄文。	覆土中	
TP10	弥生土器	広口壺	-	(3.5)	_	雲母・長石	灰褐	普通	隆帯が3本巡り指頭による押圧がみられる。その上下に櫛歯条工具による波状文。	覆土中	
TP11	弥生土器	広口壺	-	(2.0)	_	長石・石英	にぶい橙	普通	スリット手法による1単位4本の縦 区画充填波状文。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅(径)	孔径	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
DP 1	管状土錘	4.5	3.2	1.2	51.1	_	外面ナデ。		東壁中央床面	PL 5
DP 2	紡錘車	1.8	4.8	0.6	(25.9)	_	外面ナデ。		北壁中央覆土 中層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徵	出土位置	備考
Q 1	石鏃	2.0	1.3	0.5	0.9	チャート	両面入念な押圧剥離。基部に深い抉り。	北壁中央床面	PL 5
Q 2	穂摘具ヵ	7.6	3.7	1.0	50.4	蛇紋岩	側縁に交互剥離による刃部作出。	東部中央床面	PL 5
Q 3	炉石	25.2	6.5	5.7	1443	凝灰岩	被熱。	中央部覆土下 層	PL 6

第2号住居跡(第6図)

位置 調査区中央部のA1g9区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 西部で第9号住居跡を掘り込み、南東部を第1号住居跡、西部中央を第2号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸は推定5.70m,短軸は推定5.06mで,隅丸長方形と考えられ,主軸方向は $N-29^\circ-E$ である。壁高は $16\sim36$ cmで,各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、炉の周辺が踏み固められている。

炉 2 か所。炉 1 は中央部北寄りに位置し,長径52cm,短径45cmの楕円形で,床面を 6 cmほど掘りくぼめた地床炉であり,炉床は被熱により赤変硬化している。炉石は長軸と平行で,中央部に据えられており,上面が被熱によって赤変している。炉 2 は中央部の南寄りに位置し,長径35cm,短径25cmの楕円形で,床面をほとんど掘り込まず,炉床面は被熱により赤変硬化している。炉 1 には炉石が遺存しているため,炉 2 より新しいと思われる。

炉 1 土層解説

1 暗赤褐色 焼土ブロック多量,ローム粒子微量

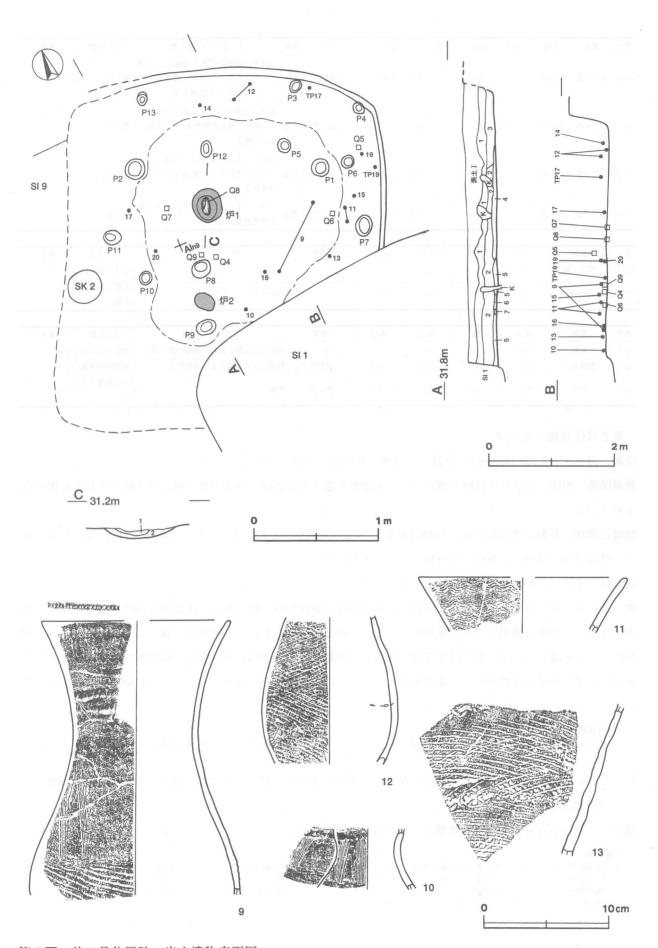
2 黄褐色 ロームブロック少量

ピット 13か所。 $P1 \sim P13$ は,配置や深さが不規則であるが, $P1 \cdot P2$ が主柱穴と考えられ,その他のピットは性格は不明である。

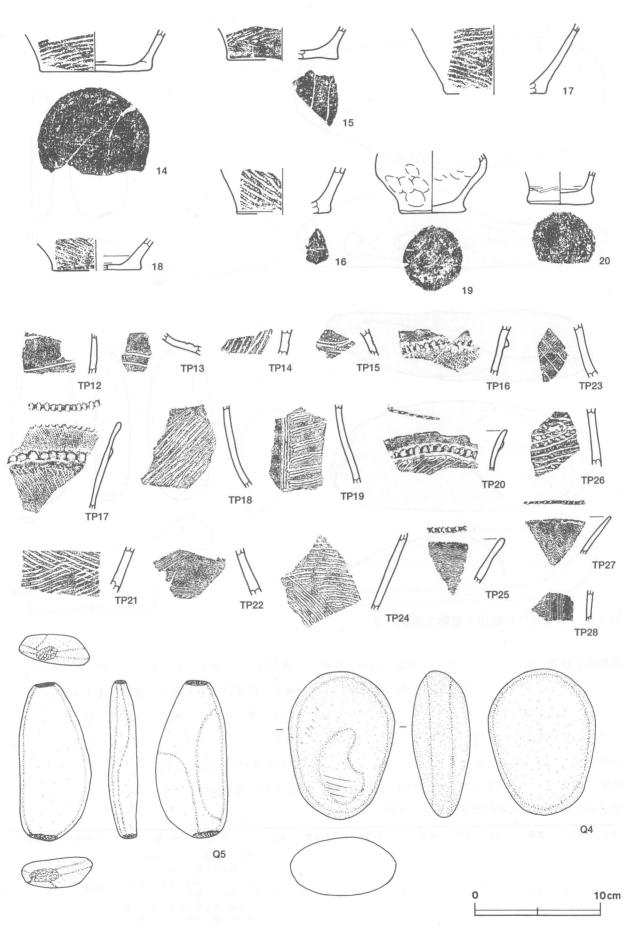
覆土 7層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

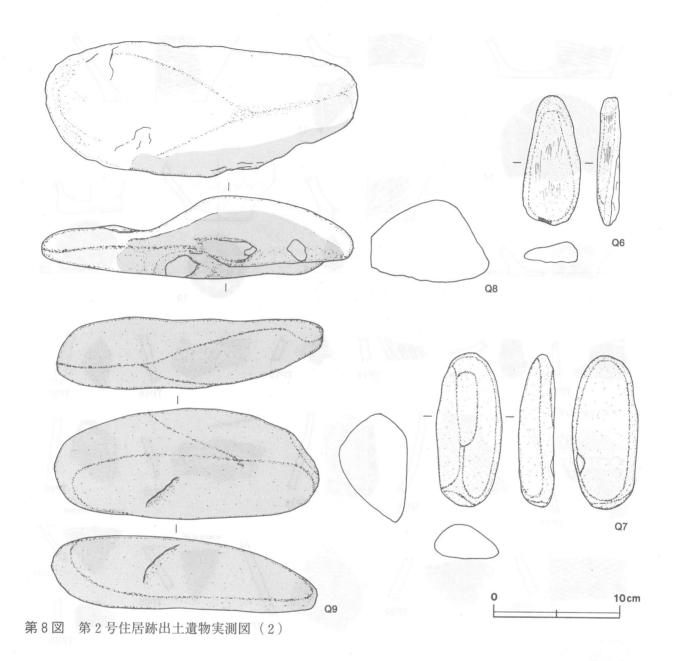
- 1 暗褐色 ロームブロック少量,炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック中量
- 6 褐 色 ロームブロック多量
- 7 暗赤褐色 焼土ブロック多量, ロームブロック微量



第6図 第2号住居跡・出土遺物実測図



第7図 第2号住居跡出土遺物実測図(1)



遺物出土状況 弥生土器片91点、土師器片18点(坏類 2、甕類16)、石製品 7点(磨石 5、炉石 2)が出土している。弥生土器はほとんどが壺形土器の胴部細片で、口縁部や底部は微量である。遺物は覆土中層から床面にかけてほぼ全域に散在しており、9は中央部の床面と中央部の覆土下層から出土した破片が接合している。10は中央部の床面から正位の状態で出土している。磨石は炉 1・2の間と北東部から出土し、住居内での作業空間を考える上で貴重な資料であろう。また、TP12~TP15は弥生時代中期の遺物と考えられる。

所見 時期は,出土土器や第1号住居跡との重複関係から弥生時代後期後半と考えられる。 第2号住居跡出土遺物観察表(第6~8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
9	弥生土器	広口壺	[15.2]	(21.8)	_	長石	にぶい褐	普通	口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は櫛歯状工具(1単位6本)に よる波状文。口辺部と頸部の境は隆 帯が3本巡り,頸部はスリット手法 による縦区画充填波状文を施文。胴 部は附加二種(附加1条)の縄文が 施文され、羽状構成。	中中如 爾 1. 丁	30%, PL4

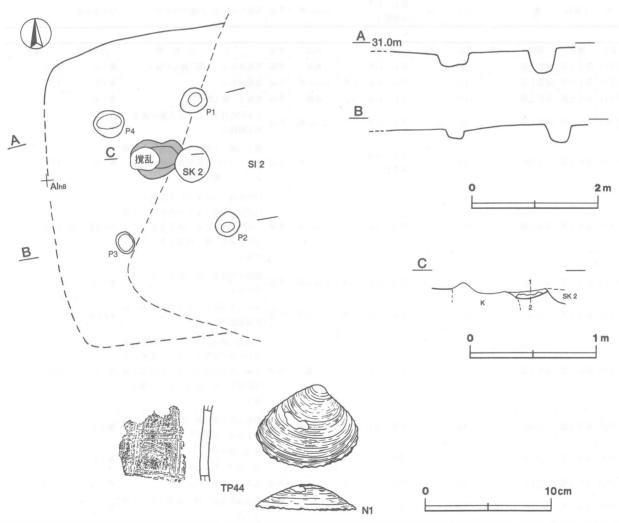
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
10	弥生土器	広口壺	_	(4.7)	_	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	頸部は1本の隆帯が巡り, スリット 手法による縦区画充填波状文 (1単 位6本)を施文。	中央部床面	PL 4
11	弥生土器	広口壺	[16.6]	(4.4)	-	長石・石英 赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は櫛歯状工具 (1単位4本) に よる波状文。	東部中央覆土下層	
12	弥生土器	広口壺	_	(11.7)	_	長石・石英・小礫	にぶい褐	普通	頸部は櫛歯状工具による波状文。胴 部は附加二種(附加1条)の縄文が 羽状に施文。	北壁中央部覆 土下層	20%, PL 4
13	弥生土器	広口壺	_	(12.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	胴部は附加条二種(附加 1 条)の縄 文で羽状構成をとり,原体端部痕が みられる。	東部中央覆土下層	
14	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	[8.6]	雲母・長石 石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部は附加条二種 (附加 1 条) の縄 文。底部布目痕。	北壁中央覆土 下層	PL 4
15	弥生土器	広口壺		(2.5)	[8.8]	長石・石英	にぶい黄橙	普通	胴部は附加条二種(附加 1 条)の縄 文。底部木葉痕。	東部中央覆土中層	
16	弥生土器	広口壺	-	(3.6)	[7.0]	雲母・長石・石英	にぶい黄褐	普通	胴部は附加条一種(附加 2 条)の縄 文。底部木葉痕。	中央部床面	
17	弥生土器	広口壺	_	(5.4)	[8.0]	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部は附加条二種(附加 1 条)の縄 文。	西部中央床面	
18	弥生土器	広口壺	_	(2.4)	[7.0]	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部は附加条二種 (附加 1 条) の縄 文。	覆土中	
19	土師器	手捏土器	_	(4.8)	4.8	長石	にぶい黄橙	普通	外面指頭痕,内面爪痕。	北東部覆土下層	
20	土師器	甕	_	(2.5)	5.0	長石・石英赤色粒子	にぶい橙	普通	外面へラ磨き,内面へラナデ。	中央部床面	
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	
		壺形土器	——————————————————————————————————————	(3.0)	- EX III	長石・石英	褐灰	普通	沈線渦巻文。上端に縄文が施文。	覆土中	PL 7
		壺形土器		(1.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	沈線渦巻文。	覆土中	PL 7
TP14		壺形土器		(1.9)	_	長石・石英	灰褐	普通	沈線文。地文細縄文。	覆土中	
	弥生土器			(2.0)	-	雲母・石英	にぶい褐	普通	2本同時施文具による沈線区画文。 地文細縄文。	覆土中	
TP16											
	弥生土器	広口壺	-	(3.9)	_	長石・石英 赤色粒子	にぶい橙	普通	複合口縁で下端は棒状工具による押 圧。その下位は附加条二種(附加1 条)による縄文を施文。	覆土中	PL 7
TP17	弥生土器 弥生土器		-	(6.5)	_		にぶい橙	普通普通	圧。その下位は附加条二種(附加1		PL 7
		壺形土器	-		-	赤色粒子			圧。その下位は附加条二種(附加1条)による縄文を施文。 口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は隆帯が1本巡り指頭による強い押圧がみられる。隆帯を挟んで上 下に附加条一種(附加2条)の縄文		
TP18	弥生土器	壺形土器 広口壺	_	(6.5)	-	赤色粒子	にぶい褐	普通	圧。その下位は附加条二種(附加1条)による縄文を施文。 口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は隆帯が1本巡り指頭による強 い押圧がみられる。隆帯を挟んで上 下に附加条一種(附加2条)の縄文 が施文。 頸部は附加条一種(附加2条)の縄	北東部覆土下層	
TP18	弥生土器	壺形土器 広口壺 広口壺	-	(6.5)		赤色粒子 雲母・長石 雲母・長石・石英	にぶい褐	普通普通	圧。その下位は附加条二種(附加1条)による縄文を施文。 口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は隆帯が1本巡り指頭による強い押圧がみられる。隆帯を挟んで上下に附加条一種(附加2条)の縄文が施文。 顕部は附加条一種(附加2条)の縄文を施文。 スリット手法による1単位5本の縦	北東部覆土下層 覆土中 東部北覆土下層	PL7
TP18 TP19 TP20	弥生土器 弥生土器 弥生土器	壺形土器 広口壺 広口壺 壺形土器	-	(6.5)	_	赤色粒子 雲母・長石 雲母・長石・石英 雲母・長石・石英	にぶい褐 にぶい褐 にぶい橙	普通普通	圧。その下位は附加条二種(附加1条)による縄文を施文。 口唇部はヘラ状工具による刻み。口辺部は隆帯が1本巡り指頭による強い押圧がみられる。隆帯を挟んで上下に附加条一種(附加2条)の縄文が施文。 顕部は附加条一種(附加2条)の縄文を施文。 スリット手法による1単位5本の縦区画充填波状文。 口唇部は縄文が施され,口辺部は無文で下端に隆帯が1条巡り指頭による強い押圧がみられる。口辺部下端は附加条二種(附加1条)の縄文を	北東部覆土下層 覆土中 東部北覆土下層	PL 7
TP18 TP19 TP20	弥生土器 弥生土器 弥生土器 弥生土器	壺形土器 広口壺 広口壺 広口壺	-	(6.5)	-	赤色粒子 雲母・長石・石英 雲母・長石・石英 雲母・長石・石英	にぶい褐 にぶい褐 にぶい橙	普通普通通通	圧。その下位は附加条二種(附加1条)による縄文を施文。 口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は隆帯が1本巡り指頭による強い押圧がみられる。隆帯を挟んで上下に附加条一種(附加2条)の縄文を施文。 頭部は附加条一種(附加2条)の縄文を施文。 口唇部は縄文が施され,口辺部は無文で下端に隆帯が1条巡り指頭による強い押圧がみられる。口辺部による強い押圧がみられる。口辺部に端は附加条二種(附加1条)の縄文を施文。 胴部は附加条二種(附加1条)の縄	北東部覆土下層 覆土中 東部北覆土下層	PL 7
TP18 TP19 TP20 TP21 TP22	弥生土器 弥生土器 弥生土器 弥生土器	壺形土器 広口壺 広口壺 広口壺	-	(6.5) (6.0) (6.0) (3.2)	-	赤色粒子 雲母・長石・石英 雲母・長石・石英 雲母・長石	にぶい褐 にぶい褐 にぶい橙 にぶい橙	普 普 普 普 通 通 通	圧。その下位は附加条二種(附加1条)による縄文を施文。 口唇部はヘラ状工具による刻み。口辺部は隆帯が1本巡り指頭による強い押圧がみられる。隆帯を挟んで上下に附加条一種(附加2条)の縄文を施文。 頭部は附加条一種(附加2条)の縄文を施文。 スリット手法による1単位5本の縦区画充填波状文。 口唇部は縄文が施され,口辺部は無文で下端に隆帯が1条巡り指頭による強い押圧がみられる。口辺部下端は附加条二種(附加1条)の縄文を施文。 胴部は附加条二種(附加1条)の縄文を施文。 胴部は附加条二種(附加1条)の縄文を施文。 頭部は備歯状工具による山形文。頸	北東部覆土下層 覆土中 東部北覆土下層 覆土中	PL 7

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP25	弥生土器	広口壺		(3.5)	A 1 <u>0</u> A 13	石英	にぶい橙	普通	口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は櫛歯状工具 (1単位6本) に よる波状文。	覆土中	1.038
TP26	弥生土器	広口壺	-	(4.5)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胴部は附加条一種(附加1条) の縄文 を施文。	覆土中	5 11 25 11
TP27	弥生土器	広口壺	7 <u>-</u> 1	(3.0)	12 <u>12 1</u> 1	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部はヘラ状工具による刻み。口 辺部は櫛歯状工具 (1単位4本) に よる波状文。	覆土中	PL 7
TP28	弥生土器	広口壺	-	(2.2)	-	長石	にぶい橙	普通	スリット手法による縦区画充填波状文。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徵	出土位置	備考
Q 4	磨石	11.6	8.4	4.6	41.5	砂岩	片面研磨痕。	中央部覆土下層	PL 6
Q 5	磨石	12.5	5.7	2.3	209.1	砂岩	3 面研磨痕。両端部敲打痕。	東部北覆土上層	PL 6
Q 6	磨石	10.2	4.4	1.6	102.9	砂岩	両側面研磨痕。両端部敲打痕。	東部中央覆土下層	PL 6
Q 7	磨石	12.2	5.3	2.8	252.4	緑色凝灰岩	全面研磨痕。	中央部床面	PL 6
Q 8	炉石	24.9	10.7	6.5	1758.4	砂岩	被熱。	炉1覆土上層	4 4 4 .
Q 9	炉石	21.1	8.8	5.8	1345.6	砂岩	被熱。	中央部床面	PL 6

第9号住居跡(第9図)

位置 調査区中央部のA1g8区に位置し、台地の平坦部に立地している。



第9図 第9号住居跡・出土遺物実測図

重複関係 東部の大部分を第2号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 長軸は推定4.80m,短軸は第2号住居跡に掘り込まれているため,確認できたのは2.52mで,隅丸方形または隅丸長方形と考えられ,主軸方向はN-0°である。遺構確認の時点で床面が確認されたため壁高は確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。硬化面は確認できなかった。

炉 1 か所。ほぼ中央部に位置し,東部を第 2 号土坑,中央部を撹乱によりそれぞれ掘り込まれている。長径 87cm,短径55cmの不整楕円形で,床面を 8 cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は一部撹乱を受けているが,残存部分は被熱により赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒 褐 色 焼土ブロック・炭化粒子微量

2 暗赤褐色 焼土ブロック中量, ロームブロック少量

ピット 4 か所。 P 1 は深さ40cm, P 2 は深さ29cm, P 3 は深さ12cm, P 4 は深さ18cmで, 配置から主柱穴に 相当すると考えられる。

覆土 遺構確認の時点で床面が確認されたため不明である。

遺物出土状況 弥生土器片38点,土師器片9点(坏類1,甕類8),貝製品1点(貝刃)が出土している。遺物は少なく,覆土中からTP44とN1が出土している。

所見 遺物はいずれも覆土中からの出土であり、時期特定は困難であるが、第2号住居跡との重複関係から弥 生時代後期と考えられる。

第9号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号 看	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
ΓP44 弥生	生土器	広口壺	_	(6.0)	_	長石・石英	橙	普通	櫛歯状工具 (1単位4本) による縦 横の櫛描文。頸部と胴部の境は横走 文により区画。		PL 7

番号	器種	長さ	唱	厚さ	車 重	材質	符 囡	出土江直	加考
N 1	貝刃	6.5	8.0	2.0	27.5	ハマグリ	側縁に刃部作出。全面摩耗。	覆土中	PL 5

表 2 弥生時代竪穴住居跡一覧表

住居跡	/1. III	主軸方向	THE THE WAY	規 模(m)	壁高	床面		内部加			覆土	主な出土遺物	備考
番号	位置	(長軸方向)	平面形	(長軸×短軸)	(cm)	水Щ	壁溝	主柱穴	ピット	炉・竈	12人	エな田工風物	(時期)
1	A 1 h9	N-83° - E	[隅丸方形・隅丸長方形]	4.90 × (3.02)	6~16	平坦	_	2	2		自然	弥生土器 (広口壺), 管状 土錘, 紡錘車, 石鏃, 穂 摘具ヵ	你生時代後期後半
2	A 1 g9	N-29° - E	[隅丸長方形]	[5.70×5.06]	16~36	平坦	_	_	13	炉2	自然	弥生土器(広口壺),磨石, 炉石	弥生時代後期後半 SI9→本跡→SI1・SK2
9	A 1 g8	N-0°	[隅丸方形・ 隅丸長方形]	[4.80] × (2.52)	_	平坦	_	4	_	炉1	不明	弥生土器(広口壺),貝刃	弥生時代後期 本跡→SI2・SK2

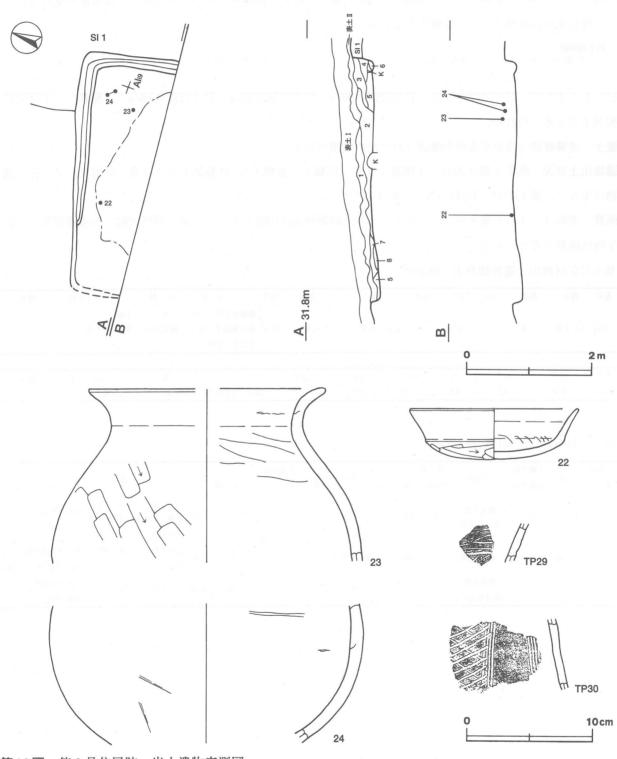
2 古墳時代の遺構と遺物

今回の調査で、竪穴住居跡6軒、土坑1基を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡(第10図)

位置 調査区南部のA1i8区に位置し、台地の平坦部に立地している。



第10回 第3号住居跡·出土遺物実測図

重複関係 北東部で第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸は3.84m, 短軸は調査区域外に延びるため、確認できたのは1.52mで、方形または長方形と 考えられ、主軸方向は $N-75^{\circ}-E$ である。壁高は $16\sim30$ cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部の広い範囲が踏み固められている。壁構は北壁半分と東壁に沿って巡っている。

竈 検出されていない。

ピット 検出されていない。

覆土 8層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。第6層は壁溝の土層である。

土層解説

色 ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量 1 暗 褐

2 暗 褐 色 ロームブロック中量,焼土ブロック・炭化粒子

微量

3 極 暗 褐 色 ロームブロック少量,炭化粒子微量

色 ロームブロック中量 褐

5 褐 色 ロームブロック多量

色 ロームブロック中量,炭化粒子微量 6 裾

7 暗赤褐色 焼土ブロック多量,ロームブロック微量

8 にぶい赤褐色 ロームブロック中量,焼土粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片18点,土師器片29点(坏類4,甕類25)が出土している。遺物は北東部の覆土上層 から床面にかけて散在している。22は北壁中央部付近の床面から出土している。図示した弥生土器片はいずれ も覆土中からの出土であり、流れ込みと思われる。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表(第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
22	土師器	坏	13.6	4.0	1	雲母	明赤褐	普通	体部外面へラ削り、内面へラナデ。	北部中央床面	60%, PL 4
23	土師器	甕	[19.0]	(13.7)	-	雲母・石英	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り,内面へラナデ。 輪積み痕。	北東部覆土上 層	10%
24	土師器	甕	_	(11.0)	-	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ナデ,内面ヘラナデ,輪積 み痕。	北東部覆土上 層	5 %

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP29	弥生土器	壺形土器	-	(3.0)	-	長石	橙		沈線が数条巡り, 沈線によって区画 され, 区画内に縄文施文。		
TP30	弥生土器	広口壺	-	(5.5)	_	長石・石英・小礫	橙	普通	スリット手法による縦区画充填格子 目文。	覆土中	PL 7

第4号住居跡(第11図)

位置 調査区東部のA1h0区に位置し、台地の平坦部に立地している。

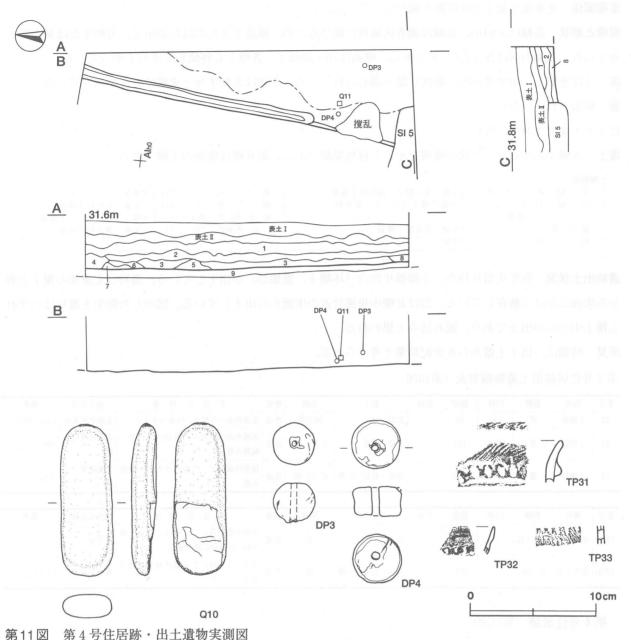
重複関係 南部を第5号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 住居範囲が調査区域外に延びているため、確認できたのは長軸5.34m、短軸1.30mで、方形また は長方形と考えられ、主軸方向はN-6°-Eである。壁高は $30\sim40$ cmで、壁は外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、貼り床をしており、広い範囲が踏み固められている。壁溝は西壁の一部で確認できた。

竈 検出されていない。

ピット 検出されていない。



第 II 因 第 4 9 压应则 · 田工度彻天侧因

覆土 9層からなり、第 $1\sim4$ 層は層位に乱れがないことから自然堆積と考えられる。第 $5\sim7$ 層は不規則な堆積状況から人為堆積と考えられる。第9層は貼り床の土層である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量,焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 焼土ブロック微量
- 3 暗 褐 色 ロームブロック少量,炭化粒子微量 4 極暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 4 極暗物色 ロームブロック・光エノロック 5 褐 色 ロームブロック中量

- 6 暗褐色 ロームブロック・焼土ブロック少量
- 7 暗赤色 焼土ブロック多量, ロームブロック微量
- 8 暗褐色 ロームブロック少量
- 9 明褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 弥生土器細片35点,土師器片44点(坏類4,甕類40),土製品2点(球状土錘1,紡錘車1),石製品1点(敲石)が出土している。遺物は細片がほとんどであるため図示できなかった。弥生土器片はいずれも覆土中からの出土であり,流れ込んだものである。

所見 遺物が細片のため時期特定は困難であるが、出土土器や、第5号住居跡との重複関係などから6世紀前葉と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表(第11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP31	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	L	石英	にぶい橙	普通	口唇部はヘラ状工具による刻みが施され、口辺部は附加条二種(附加1条)の縄文が施され、その下に指頭による隆帯が1条巡る。	覆土中	PL 7
TP32	弥生土器	広口壺	-	(2.4)		雲母・長石	灰褐	普通	口唇部はヘラ状工具による刻みが施され、1段の複合口縁。口辺部は指頭による隆帯が1条巡る。	覆土中	
TP33	弥生土器	広口壺	-	(1.5)		長石・石英	橙	普通	附加条一種(附加1条) の縄文を施文 後,棒状工具による刺突。	覆土中	

番号	器種	長さ	幅(径)	孔径	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
DP 3	球状土錘	3.2	3.4	0.4	33.3	Jij -/ . i	球体、外面ナデ。	南部中央覆土上層	PL 5
DP 4	紡錘車	2.4	3.8	0.5	41.5	44	外面ナデ。	南西部覆土中層	PL 5

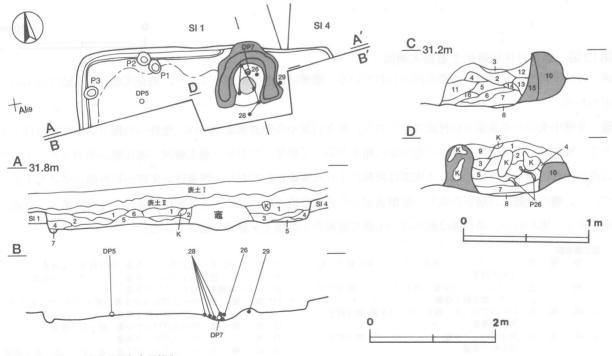
番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特	徴	出土位置	備考
Q10	敲石	12.0	4.2	2.0	(153.9)	砂岩	端部敲打痕。		南西部覆土中層	PL 6

第5号住居跡(第12図)

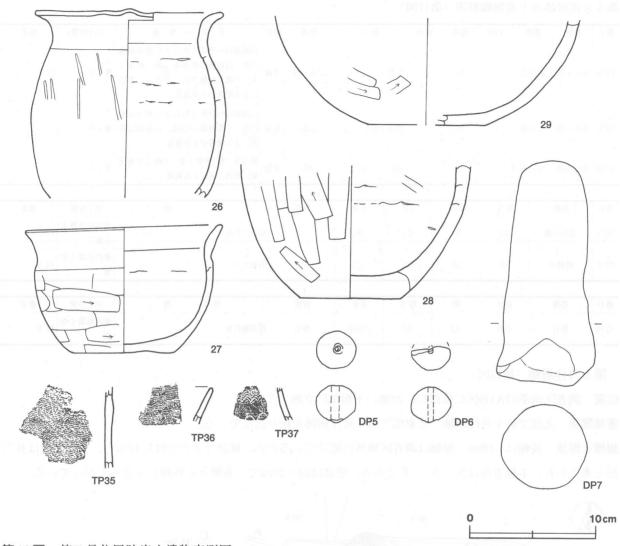
位置 調査区南部のA1i9区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 北部で第1号住居跡、北東部で第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸は4.08m,短軸は調査区域外に延びているため、確認できたのは1.12mで、方形または長方形と考えられ、主軸方向はN-9°-Eである。壁高は24~28cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。



第12図 第5号住居跡実測図



第13回 第5号住居跡出土遺物実測図

床 ほぼ平坦で、北西部分が踏み固められている。壁溝は西半分に巡っており、調査区域外にも延びるものと 思われる。

電 北壁中央のやや東寄りに付設されており、焚き口部から煙道部まで78cm、壁外への掘り込みは10cmほどである。袖部は、床面と同じ高さの地山面に粘土を貼って構築しており、竈土層図の第10層が相当する。火床部は浅い皿状に掘りくぼめられ、火床面は被熱により赤変硬化しており、煙道は火床部から外傾して立ち上がっている。竈の土層は18層から成り、堆積状況から自然堆積と思われる。天井部は崩落しており、第5・6層が相当すると思われる。第15層は掘り方の土層で暗褐色土に粘土を混ぜて貼っている。

竈土層解説

- 1 暗 褐 色 ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘 土粒子微量
- 2 褐 色 ロームプロック中量, 焼土プロック・粘土プロック・炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 ロームプロック・粘土プロック少量, 焼土粒子・ 炭化物微量
- 4 暗 褐 色 粘土プロック少量, ロームプロック・焼土粒子・ 炭化粒子微量
- 5 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量, 焼土ブロック少量
- 6 明 赤 褐 色 焼土ブロック・粘土ブロック多量,炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 7 極 暗 褐 色 灰中量,焼土ブロック・炭化粒子少量,ローム ブロック数量

- 8 暗赤褐色 焼土ブロック多量,炭化粒子・灰微量
- 9 暗 褐 色 粘土ブロック中量, ロームブロック微量
- 10 にぶい黄褐色 粘土ブロック多量
- 11 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土ブロック・粘土ブロック・炭化粒子微量
- 12 暗 褐 色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 13 褐 色 ロームブロック多量
- 14 暗 褐 色 ロームプロック少量, 焼土粒子・粘土粒子微量
- 15 暗 褐 色 ロームブロック少量、焼土ブロック・粘土ブロック微量
- 16 暗 褐 色 焼土ブロック・粘土ブロック少量, ロームブロック・炭化粒子微量

ピット 3か所。配置や深さが不規則であるため、性格は不明である。

覆土 7層からなるブロック状の堆積を示した人為堆積である。第7層は壁溝の土層である。

土層解説

色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量 1 暗

色 ロームブロック中量,炭化粒子微量

5 暗 褐 色 ロームブロック中量, 粘土粒子微量 6 にぶい黄褐色 粘土ブロック中量,ロームブロック少量,焼土 粒子・炭化粒子微量

褐 色 炭化粒子少量,ロームブロック・焼土粒子微量 3 黒 色 ロームブロック中量, 焼土粒子微量

色 ロームブロック中量

遺物出土状況 弥生土器片28点,土師器片41点(坏類3,甕類38),土製品3点(球状土錘2,支脚1),石製 品1点(剥片)が出土している。遺物は竈内や北西部の覆土中層から床面にかけて出土している。DP7は竈の 火床部から直立した状態で出土し、本来の位置を保ったままの状況を示している。また、竈内からは26が正位 の状態で、28が散らばった状態で出土しており、竈の土層が自然堆積を示していることから、遺棄されたもの と想定される。弥生土器片はいずれも覆土中からの出土であり、混入と思われる。

所見 時期は、床面及び竈内の出土土器から6世紀中葉から後葉と考えられる。

第5号住居跡出土遺物観察表(第13図)

番号	種別	器種	重	口径	器高	底径		胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
26	土師器	费		14.8	(14.7)	_	雲母	・長石・石英	灰褐	普通	体部外面ヘラナデ, 内面ヘラ磨き, 輪積み痕,口縁部指頭痕。	竈覆土下層	60%, PL 4
27	土師器	蹇		15.7	10.1	8.1	長石	・石英	にぶい黄橙	普通	体部外面へラ削り, 内面ナデ, 輪積 み痕。	竈覆土中	90%, PL 4
28	土師器	甕		-	(10.5)	8.0	雲母	・長石・石英	灰褐	普通	体部外面へラ削り, 内面へラナデ, 輪積み痕。	竈覆土下層~ 火床部	40%
29	土師器	甕		_	(8.5)	[9.4]	雲母	・長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面へラ削り、内面摩耗。	竈付近床面	10%
番号	種別	器和	重	口径	器高	底径		胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP35	弥生土器	広口	壺	_	(6.5)	_	長石	・石英	にぶい褐	普通	櫛歯状工具(1単位4本)による波 状文。	覆土中	
TP36	弥生土器	広口	壺	-	(3.0)		長石		にぶい褐	普通	櫛歯状工具(1単位4本)による波 状文。	覆土中	
TP37	弥生土器	広口	壺	-	(2.6)	_	長石	・石英	にぶい褐	普通	櫛歯状工具(1単位3本)による波 状文。	覆土中	
番号	器種		ł	長さ	幅(径)	孔	径	重量	材質		特	出土位置	備考
DP 5	球状土	錘		3.0	2.9	0.6	5	25.3	-	球体,	外面ナデ。	北西部床面	PL 5
DP 6	球状土	錘	(2.8)	3.2	0.4	1	(13.3)	_	球体,	外面ナデ。	覆土中	
番号	器種		ł	長さ	幅	厚	č	重量	材質		特徵	出土位置	備考
DP 7	支脚			17.9	7.7	6.	6	672.9	-	ナデ,	被熱。	竈火床部	

第6号住居跡(第14図)

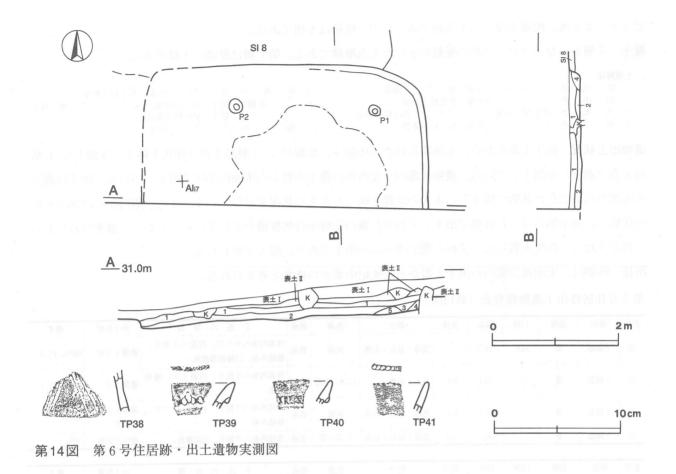
位置 調査区中央部のA1h7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 北部で第8号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸は推定4.60m, 短軸は調査区域外に延びるため、確認できたのは2.20mで、隅丸方形または 隅丸長方形と考えられ、主軸方向は $N-88^{\circ}-W$ である。壁高は $11\sim19$ cmで、各壁とも外傾して立ち上がって

床 ほぼ平坦で、中央部分が踏み固められている。

竈 検出されていない。



覆土 5層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック微量

2 暗褐色 ロームブロック少量

3 褐 色 ロームブロック少量,炭化粒子微量

4 褐 色 ロームブロック中量

5 褐 色 ロームブロック中量,炭化粒子微量

遺物出土状況 弥生土器片21点,土師器片14点(坏2,甕類12),石製品1点(剥片)が出土している。本跡に伴う遺物はほとんどが細片であり、図示できなかった。弥生土器片は覆土中からの出土であり、流れ込みと考えられる。

所見 時期は、出土土器や第8号住居跡を掘り込んでいることから6世紀代と考えられる。

第6号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP38	弥生土器	広口壺	-	(3.2)	-	長石・石英	灰褐	普通	櫛歯状工具(1単位3本)による山 形文。	覆土中	PL 7
TP39	弥生土器	広口壺	-	(2.1)	_	長石	灰褐	普通	口唇部は縄文が施され、1段の複合 口縁で下端は棒状工具による押圧。	覆土中	
TP40	弥生土器	広口壺	20.m	(1.8)	\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	雲母・長石	褐灰	普通	口唇部は縄文が施され、1段の複合 口縁で下端は棒状工具による押圧。	覆土中	原模と形
TP41	弥生土器	広口壺	5.M_, s	(2.4)	- 41	雲母・長石	灰褐	普通	口唇部はヘラ状工具による刻みが施され、口辺部は櫛歯状工具(1単位 6本)による波状文。	覆土中	PL7

第7号住居跡(第15図)

位置 調査区西部のA1h5区に位置し、台地の平坦部に立地している。

規模と形状 調査区域外に延び、確認できたのは長軸2.49m、短軸0.98mで、方形または長方形と考えられ、主軸方向はN-4°-Wである。壁高は26~38cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部が踏み固められている。

竈 検出されていない。

ピット 検出されていない。

覆土 6層からなり、壁際が三角形状の堆積状態を示していることから、自然堆積である。

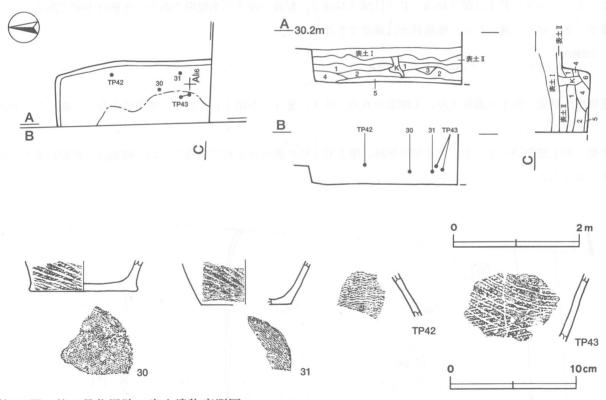
土層解説

- 1 黒褐色 炭化粒子少量,ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量

- 4 極暗褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック微量

遺物出土状況 弥生土器片21点,土師器片18点(坏類 6 ,甕類12),石製品1点(剥片1点)が出土している。 遺物は少なく,覆土中層からの出土が多い。30,31, TP43は東部の覆土中層, TP42は北東部の覆土中層から それぞれ出土しており,流れ込みと考えられる。

所見 時期は、出土土器から6世紀前葉と考えられる。



第15図 第7号住居跡·出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表(第15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴 出	位置	備考
30	弥生土器	広口壺		(2.4)	[8.6]	長石・石英	橙	普通	胴部は附加条二種 (附加 1 条) の縄 東部中文。底部布目痕。 中層	央覆土	5 %

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
31	弥生土器	広口壺	_	(3.5)	[7.2]	長石・石英 赤色粒子	にぶい黄橙	普通	胴部は附加条二種(附加1条)の縄文。 底部布目痕。	東部中央覆土 中層	5 %
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
TP42	弥生土器	広口壺	_	(3.2)	-	雲母・長石	にぶい褐		頸部は波状文が巡り, 頸部と胴部の 境は櫛歯状工具 (1単位4本)によ る連弧文。	北東部中央覆土中層	PL7
TP43	弥生土器	広口壺	_	(5.0)	. 1	長石・小礫	にぶい橙	要通 し	附加条二種(附加1条) の縄文。 羽状 構成。	東部中央覆土 中層	:

第8号住居跡(第16図)

位置 調査区中央部のA1h7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 南部を第6号住居跡,西部を第1号溝,中央部を第1号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と形状 長軸4.80m,短軸は調査区域外に延びるため,確認できたのは3.28mで,隅丸方形または隅丸長方形と考えられ,主軸方向は $N-88^\circ-W$ である。壁高は $8\sim10$ cmで,壁の立ち上がりは壁高が低いため明確には確認できなかった。

床 ほぼ平坦で、南東部の一部が踏み固められている。

竈 検出されていない。

ピット 2 か所。P 1 は深さ48cm, P 2 は深さ34cmで,配置や深さが不規則であり,性格は不明である。

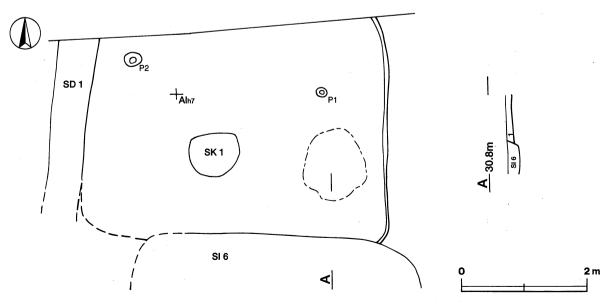
覆土 単一層で、薄いため、堆積状況は確認できなかった。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック少量、焼土ブロック微量

遺物出土状況 弥生土器片 4 点, 土師器片 6 点(坏 3, 甕 3)が出土している。遺物は少なく, 細片のため図示できなかった。

所見 出土遺物は少ないが、第6号住居跡、第1号土坑に掘り込まれていることから時期は6世紀前葉から中葉と考えられる。



第16図 第8号住居跡実測図

表 3 古墳時代竪穴住居跡一覧表

住居跡	住居跡 ,, ,,,			規 模(m)	壁高	ete seri	内部施設					主な出土遺物	備考
番号	位置	(長軸方向)	平面形	(長軸×短軸)	(cm)	床面	壁溝	主柱穴	ピット	炉・竈	覆土	土な田工風物	(時期)
3	A 1 i8	N-75° - E	[方形・長方 形]	3.84× (1.52)	16~30	平坦	一部		-	_	自然	土師器(坏・甕)	6 世紀前葉 SI 1 →本跡
4	A 1 h0	Ņ-6°-E	[方形・長方 形]	(5.34×1.30)	30~40	平坦	一部	_	-	_	自然 人為	土師器 (坏・甕), 球状土 錘,紡錘車,敲石	6 世紀前葉 本跡→SI5
5	A 1 i9	N-9°-E	[方形・長方 形]	4.08× (1.12)	24~28	平坦	一部	_	3	竈 1	人為	土師器 (甕), 球状土錘, 土製支脚	6世紀中葉〜後葉 SI1・SI4→本跡
6	A 1 h7	N-88° -W	[隅丸方形・ 隅丸長方形]	[4.60] × (2.20)	11~19	平坦		2	_	_	自然	土師器 (坏・甕)	6 世紀代 SI8→本跡
7	A 1 h5	N-4°-W	[方形・長方 形]	(2.49×0.98)	26~38	平坦	_	_	_	_	自然	土師器(坏・甕)	6世紀前葉
8	A 1 h7	N-88° -W	[隅丸方形・ 隅丸長方形]	(4.80×3.28)	8~10	平坦	_	2		_	不明	土師器(坏・甕)	6世紀前葉~中葉 本跡→SI6・SK1・SD1

(2) 土坑

第1号土坑 (第17図)

位置 調査区中央部のA1h7区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 第8号住居跡の中央部を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.84m, 短径0.64mの楕円形であり、長径方向は $N-90^{\circ}-W$ である。深さは30cmで、底面は皿状で壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 3層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

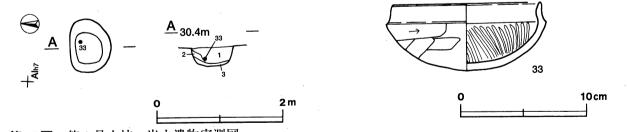
土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量
 2 暗褐色 ロームブロック中量

3 褐色 ロームブロック多量

遺物出土状況 土師器片 5 点 (甕) が出土している。遺物は北東部の覆土中層に集中しており、33は北東部の 覆土中層から正位の状態で出土している。

所見 時期は、出土土器から6世紀中葉と考えられる。



第17図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑跡出土遺物観察表(第17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備考
33	土師器	坏	11.8	5.3	-	雲母・長石 石英・赤色粒子	浅黄橙	普通		北東部覆土 中層	100%, PL4

3 その他の遺構と遺物

今回の調査で、時期が明確でない土坑1基、溝跡1条を確認した。以下、検出された遺構及び遺物について記載する。

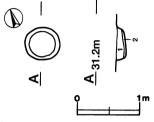
(1) 土坑

第2号土坑 (第18図)

位置 調査区中央部のA1g8区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 第2号住居跡の西部中央を掘り込んでいる。

規模と形状 長径0.54m,短径0.52mの円形である。深さは14cmで,底面は平坦で壁は外傾して立ち上がって



覆土 2層からなるレンズ状の堆積を示した自然堆積である。

土層解説

いる。

暗褐色 ロームブロック微量

2 明褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

第18図 第2号土坑実測図

所見 出土遺物がないため、時期は不明であるが、弥生時代後期後半の第2号 住居跡を掘り込んでいることから、それ以降と考えられる。

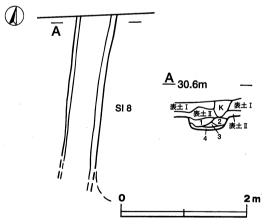
(2) 溝跡

第1号溝 (第19図)

位置 調査区西部のA1h6区に位置し、台地の平坦部に立地している。

重複関係 第8号住居跡の西部を掘り込んでいる。

規模と形状 南北方向(N-8°-E)に、直線的に延びている。深さは $16\sim20\,\mathrm{cm}$ で、確認できた長さは $2.50\,\mathrm{cm}$



第19図 第1号溝実測図

mであり、上幅 $0.54\sim0.62$ m、下幅 $0.40\sim0.48$ m、断面形は U字状を呈している。

覆土 4層からなるブロック状の堆積を示した人為堆積である。

土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量 2 暗褐色 ロームブロック少量

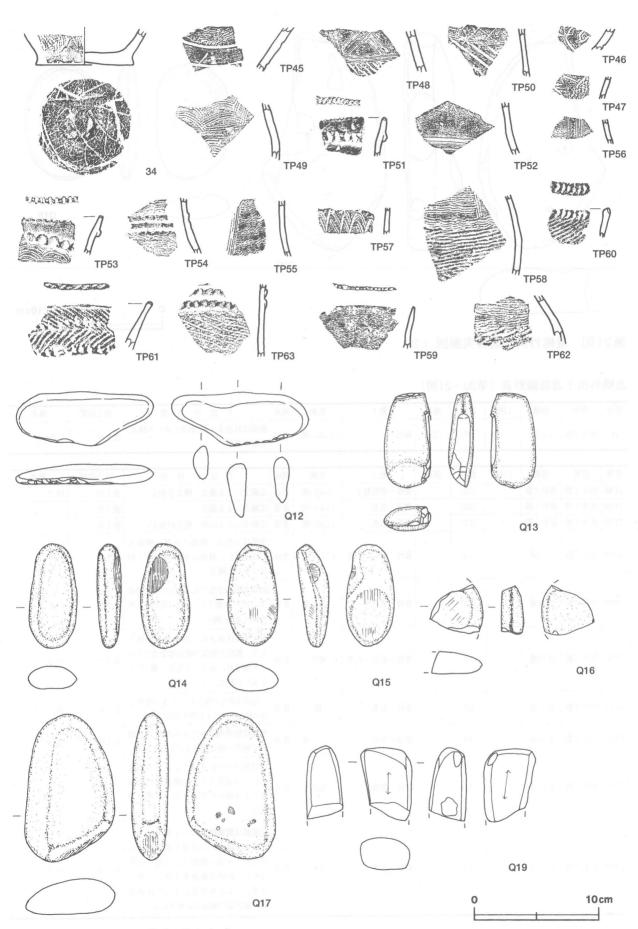
3 褐 色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土していない。

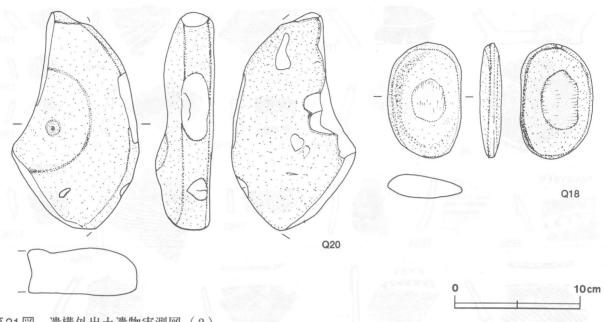
所見 出土遺物がないため、時期は不明であるが、6世紀前葉から中葉の第8号住居跡を掘り込んでいることから、それ以降と考えられる。

(3) 遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺構に伴わない主な遺物について遺物観察表で記述する。



第20図 遺構外出土遺物実測図(1)



第21図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表 (第20・21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
34	弥生土器	広口壺	-	(2.7)	[7.8]	長石	にぶい橙	普通	胴部は附加条一種(附加2条)の縄文。 底部木葉痕。	表土中	5 %
				11/2	I k			\triangle			
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP45	弥生土器	壺形土器	-	(3.5)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	沈線文による渦文。縄文が施文。	表土中	PL 7
TP46	弥生土器	壺形土器	-	(2.0)	5	雲母・長石	にぶい橙	普通	沈線文による渦文。	表土中	
TP47	弥生土器	壺形土器	-	(1.7)	-1/20	長石・石英	にぶい橙	普通	沈線文による区画。縄文が施文。	表土中	
TP48	弥生土器	広口壺	_	(3.3)	_	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	頸部は山形文。胴部との境は横走文で区画され、胴部は附加条一種 (附加2条) の縄文。	.//	PL 7
TP49	弥生土器	広口壺		(4.3)	\ <u>-</u>	雲母・長石	にぶい褐	普通	頸部は連弧文が施され、胴部との境は横走 文によって区画され、胴部は附加条二種 (附加1条)の縄文。	表土中	PL7
TP50	弥生土器	広口壺		(3.7)	_	雲母・長石・石英	褐灰	普通	頸部は縦区画され、格子目文が施される。頸部と胴部の境は横走文によって区画され、胴部は附加条二種(附加1条)の縄文。	表土中	PL7
TP51	弥生土器	広口壺	-	(2.9)	- 7	雲母・石英	橙	普通	口唇部は縄文が施され、1本の隆帯が 巡り棒状工具による押圧がみられる。	表土中	PL 7
TP52	弥生土器	広口壺	-	(4.0)	-	雲母・長石	にぶい褐	普通	頸部は櫛歯状工具による波状文。頸 部と胴部の境は横走文によって区画。	表土中	PL 7
TP53	弥生土器	広口壺	-	(3.1)		雲母・微礫	褐灰	1	口唇部はヘラ状工具による刻みが施され,口辺部は1本の隆帯が巡り指頭による押圧がみられる。下端は連弧文。	表土中	PL7
TP54	弥生土器	広口壺	o -	(4.3)	-	長石・石英	灰褐	普通	口辺部は櫛歯状工具 (1単位4本) による波状文。口辺部と頸部の境は 隆帯が2本巡り指頭による押圧がみ られる。頸部は櫛歯条工具 (1単位 4本)による波状文によって区画され、縦区画の櫛描文が施される。	表土中	PL7

番号	種別	器種	口径	器高	底径		胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
TP55	弥生土器	広口壺	i –	(4.5)		長石・	・石英	褐灰	普通	縦区画の櫛描文が施され、櫛歯状工 具(1単位4本)による波状文が巡る。	表土中	PL 7
TP56	弥生土器	広口壺	ŧ –	(2.0)	_	雲母 -	· 石英	にぶい褐	普通	スリット手法による縦区画充填波状文。	表土中	PL 7
TP57	弥生土器	広口壺	ŧ –	(2.0)	_	長石・	・石英	褐灰	普通	櫛歯状工具 (1単位6本) による波状文。	表土中	
	弥生土器	広口壺	£ -	(6.5)	_	雲母	・石英・小礫	にぶい褐	普通	頸部はスリット手法による縦区画充 填波状文。胴部との境は波状文で区 画され,胴部は附加条二種 (附加1 条)の縄文。	表土中	PL 7
TP59	弥生土器	広口壺	£ ,-	(3.2)	_	雲母	・石英	にぶい褐	普通	口唇部は縄文が施され, 口辺部は櫛 歯状工具(1単位6本)の波状文。	表土中	PL7
TP60	弥生土器	広口壺	<u> </u>	(2.3)	_	長石	・石英	橙	普通	口唇部はヘラ状工具による刻みが施され、口辺部は附加条二種 (附加2条)の縄文。	表土中	
TP61	弥生土器	広口壺	f -	(3.7)	_	雲母	・石英	にぶい褐	普通	口唇部は縄文が施され, 口辺部は附加条二種(附加1条)の縄文。	表土中	
TP62	弥生土器	広口壺	<u> </u>	(3.7)	_	雲母	・石英	にぶい褐	普通	頸部は縦区画され, 櫛歯状工具による波状文。胴部は附加条二種 (附加 1 条) の縄文。	表土中	
TP63	弥生土器	広口壺	<u> </u>	(5.7)	_	雲母	・長石・石英	にぶい橙	普通	隆帯が2本巡り指頭による押圧がみられる。下端は附加条二種(附加1条)の縄文。	1.1	
	nn 425		EV	, the		y.	重量	材質		特 徵	出土位置	備考
番号	器種		長さ	幅 40	厚			砂岩	-	側縁研磨痕。	表土中	PL 5
Q12	穂摘具		10.9	4.3		.6	90.5		-+	興務切磨限。 全面研磨。端部,右側縁一部欠損。	表土中	PL 5
Q13	1		7.5	3.7		.0	88	緑色凝灰岩			表土中	ILLU
Q14	磨石		8.3	3.9	2	.0	89.9	砂岩		3 面研磨痕。端部敲打痕。	水 上中	

Q12	穂摘具ヵ	10.9	4.3	1.6	90.5	砂岩	側縁研磨痕。	表土中	PL 5
Q13	 磨製石斧	7.5	3.7	2.0	88	緑色凝灰岩	全面研磨。端部,右側縁一部欠損。	表土中	PL 5
Q14	磨石	8.3	3.9	2.0	89.9	砂岩	3 面研磨痕。端部敲打痕。	表土中	
Q 15	磨石	8.1	3.9	2.7	97.8	砂岩	3 面研磨痕。端部敲打痕。	表土中	
Q16		(3.9)	(4.3)	1.8	(36.9)	凝灰岩	全面研磨痕。	表土中	
Q17		11.6	7.2	2.9	370.2	安山岩	全面研磨痕。	表土中	
Q 18		9.1	5.9	1.7	139.3	砂岩	全面研磨痕。	表土中	
Q19	砥石	(5.7)	4.0	2.9	(97.2)	砂岩	4 面砥面。	表土中	
Q20	石皿	(17.1)	(10.1)	(4.6)	(931.6)	礫岩	全面研磨加工。中央部皿状のくぼみ。裏面平坦。	表土中	PL 6
									<u> </u>

第4節 ま と め

今回の調査によって、弥生時代の竪穴住居跡3軒、古墳時代の竪穴住居跡6軒、土坑1基、時期及び性格不明の土坑1基、溝跡1条を検出した。出土遺物は弥生時代から古墳時代に限られている。ここでは、それぞれの時期の遺構と遺物について概要を述べ、まとめとしたい。

1 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴住居跡を3軒検出したが出土土器はいずれも細片が多く、明確に時期を分けることができなかった。しかし、第1号住居跡からはアメリカ式石鏃、穂摘具の可能性のある石器がそれぞれ床面から出土し、第2号住居跡からも磨石が5点出土するなど当時の生産活動を知る上で良好な資料も確認できた。アメリカ式石鏃については、県内では可能性のあるものも含めて、ひたちなか市東中根遺跡、同武田西塙遺跡、大宮町小祝遺跡など数遺跡が知られている。アメリカ式石鏃は弥生時代後期前半に検出されることが多いが、第1号住居跡が後期後半に位置づけられることから、当該期にもアメリカ式石鏃が使用されていた可能性が考えられる。

穂摘具の可能性のある石器は2点検出されたが、県内でも土浦市原田北遺跡、同原出口遺跡、同西原遺跡、稲敷郡阿見町花房遺跡など数例しか確認されていない。当遺跡から出土したものについては、形態から穂摘具としているが、ほかに稲作関連遺物が出土しておらず、使用痕の分析も実施していないため、可能性にとどめておきたい。穂摘具は木製、石製、鉄製、貝製のものが知られている。第9号住居跡から出土している貝刃は貝製穂摘具の可能性もあるが、今後の出土例の蓄積を待ちたい。

弥生時代の稲作の普及については周知されているが、当地域に目を向けると、近世以来、度重なる新田開発が実施されている。しかし、塩害などの影響もあり、米の収穫量はさほどではなかったようである。当該期においても稲作は困難を極めたことが想定される。しかし、周辺の長峯遺跡では籾痕付着の土器、ひたちなか市東中根遺跡からは住居の中から炭化米が検出されており、稲作は当地域にも普及していたと考えられる。水稲農耕を生活の基盤としていた弥生時代において、生産性の高い良好な農耕地を獲得することが、その集落を維持するための主要な条件であったことを考えれば、当遺跡周辺は農耕と漁労活動の両面において、極めて恵まれた場所であったと考えることができる。

また、遺構は確認されていないが、弥生時代中期の遺物も細片ではあるが検出されており、弥生時代中期から後期に至るまで周辺に集落が営まれていたことがうかがえる。

2 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡 6 軒と土坑 1 基を検出したが、弥生時代と同様に土器は細片が多く、時期決定は困難であった。古墳時代の遺物は、弥生時代後期後半の第 1 号住居跡から出土している前期の甕などを除いては後期のものに限られており、検出した 6 軒の竪穴住居跡も後期にあたるものであるため、古墳時代は後期を中心に生活が営まれていたと考えられる。

参考文献

- 1) 栃木県立なす風土記の丘資料館 『弥生人のくらし』 栃木県教育委員会 1996年
- 2) 茨城県史編集会 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年3月
- 3) 江幡良夫 『研究ノート第3号』「原田北・西原遺跡出土の穂摘具について」 茨城県教育財団 1993年
- 4) 神澤勇一 『弥生文化の研究』「貝製穂摘具」 雄山閣 1985年10月
- 5) 大宮町歴史民俗資料館 『大宮の考古遺物』 大宮町教育委員会 1995年10月
- 6) 鈴木素行ほか 『武田西塙遺跡 旧石器・縄文・弥生時代編(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第21集』 (財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社 2001年3月
- 7) 海老沢稔 『東日本弥生時代後期の土器編年 第二分冊』「茨城県における弥生後期の土器編年」 東日本埋蔵文化財 研究会福島県実行委員会 2000年1月

写 真 図 版



調査区全景 (東から)



第1・3・5号住居跡完堀状況



第5号住居跡竈遺物出土状況



第2号住居跡完堀状況



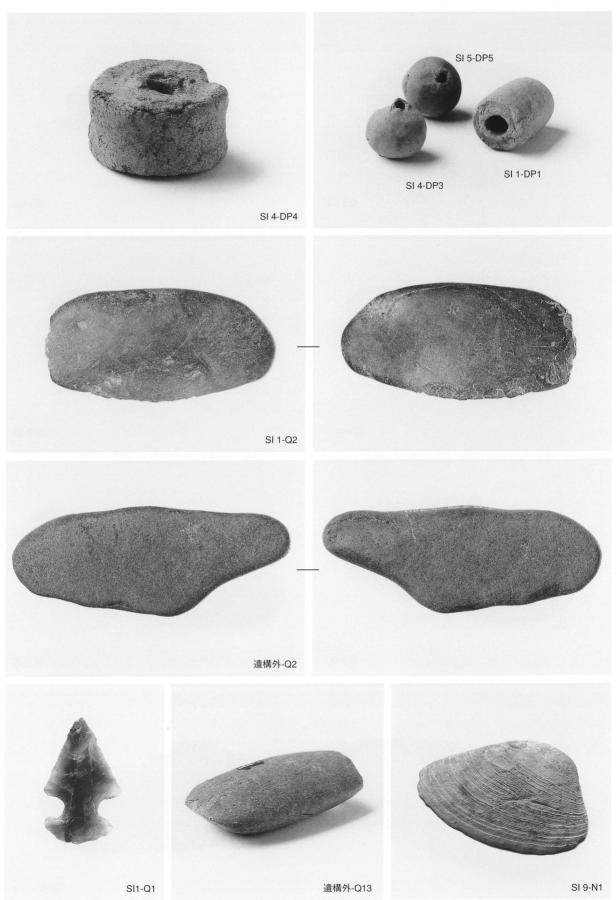
第2号住居跡炉石出土状況



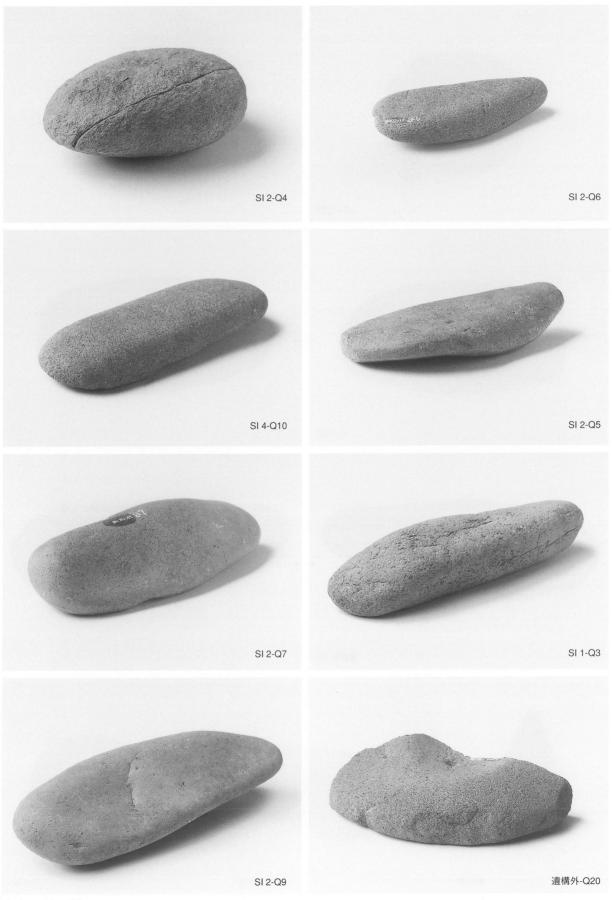
第1号土坑遺物出土状況



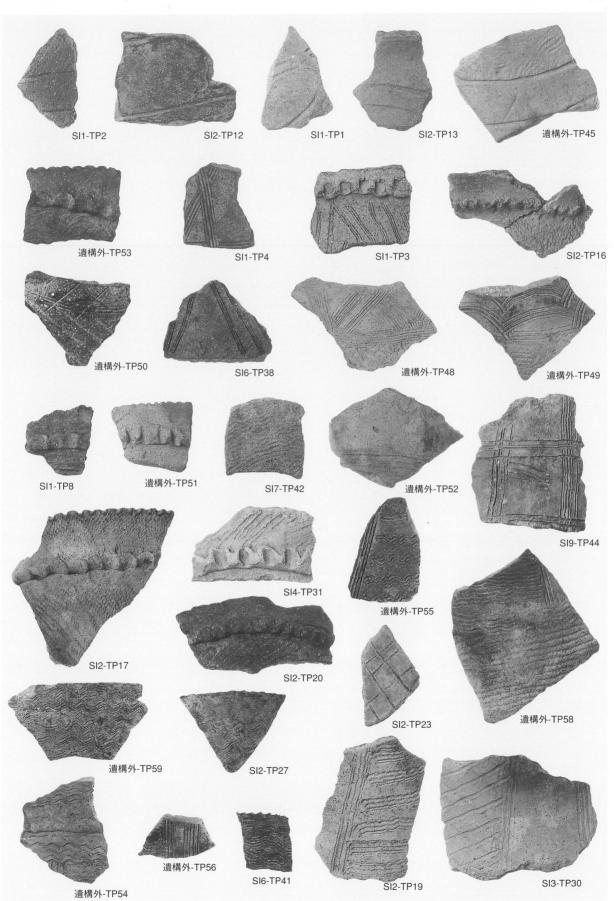
出土土器(弥生土器, 土師器)



出土土製品,石器,貝製品



出土石器, 炉石



出土土器 (弥生土器)

茨城県教育財団文化財調査報告第221集

官女平遺跡

平成16 (2004) 年 3 月24日 印刷 平成16 (2004) 年 3 月26日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団 〒310-0911 水戸市見和1丁目356番の2 茨城県水戸生涯学習センター分館内 TEL 029-225-6587

印刷 (旬 平 電 子 印 刷 所 〒970-8024 いわき市平北白土字西ノ内13 TEL 0246-23-9051